



研究用試薬

# ヒストファイン

第一抗体

抗 $\alpha$ -フェトプロテインウサギモノクローナル抗体(ヒストステイナー用)  
(動物種：ウサギ)

包装：60 テスト (12mL)

Code：718291

製造販売元

**株式会社ニチレイバイオサイエンス**

〒104-8402

東京都中央区築地 6-19-20

TEL. 03(3248)2208 FAX. 03(3248)2243

- 本品は、自動染色装置ヒストステイナー用の試薬 第一抗体である。
- 特異性および抗原分布**：ヒト $\alpha$ -フェトプロテイン(AFP)と特異的に反応する。AFPはヒト胎児期の肝臓および卵黄嚢で生成される糖タンパク質である。<sup>(4)</sup> 成人の正常血清および正常肝臓組織では検出されない。<sup>(4)(7)</sup> 腫瘍では、肝細胞癌<sup>(5)(7)</sup>、肝様腺癌<sup>(6)(8)</sup>、卵黄嚢腫瘍(Yolk Sac腫瘍)<sup>(1)(2)(3)</sup>、胎芽性癌<sup>(1)(3)</sup>、セルトリ・ライディッチ細胞腫<sup>(9)</sup>などの腫瘍において免疫染色による反応がみられる。肝細胞癌<sup>(5)(7)</sup>・肝様腺癌<sup>(6)(8)</sup>・卵黄嚢腫瘍<sup>(1)(2)(3)</sup>の区別に有用である。
- クローン名**：EP209
- 抗体のサブクラス**：ウサギ IgG
- 免疫原**：ヒト AFP 全長リコンビナントタンパク質
- 製法**：培養上清より得ている。

## 1. 内容

第一抗体・・・抗 $\alpha$ -フェトプロテインウサギモノクローナル抗体(動物種：ウサギ)。

液状。

ウシ血清アルブミン(BSA)と0.1%アジ化ナトリウムを含むリン酸緩衝生理食塩水(PBS)にて、即時使用可能な抗体濃度に希釈済み。

1 バイアル中に12mLを含む。

## 2. 使用目的

組織・細胞中の $\alpha$ -フェトプロテインの染色。

## 3. 切片の準備

前処理(抗原賦活化)としてヒストファイン 抗原賦活性化液 pH9 (Code:415201 または Code:415211)を用いたオートクレーブ処理が必要である(裏面参照)。

■**参考**：組織の固定条件等により前処理(抗原賦活化)としてヒストファイン 抗原賦活性化液pH9(Code:415201またはCode:415211)を用いた温浴処理で良好な染色結果が得られる場合がある。(裏面の■参考 参照)

## 4. 使用方法

パラフィン包埋切片の免疫組織化学および免疫細胞化学染色に使用できる第一抗体である。

1) 他の試薬とともに試薬ラック(ヒストステイナー用)にセットし、染色を開始する。

2) 染色終了後、すみやかに2-8℃に保存する。

## 5. 染色方法の設定

反応時間を30分間とする。

試薬バーコードラベルを使用する場合は、自動染色装置ヒストステイナーのプログラムにバーコードラベル情報を入力する必要がある。本製品が未登録の場合は、下記データを入力(漢字のみ全角、他半角入力)し、登録すること。

専用ボトルに貼付されているバーコードラベル内の情報

試薬名	抗 AFP ウサギモノクローナル抗体
試薬略称(10文字)	AFP-RM
バーコード	AFP-RM
時間(分)	30

## 6. 貯法および使用上の注意

1. 2-8℃保存。
2. 使用期限はラベルに記載されているので使用前に確認すること。
3. 使用前に室温に戻すこと。
4. 使用後は速やかに冷蔵保存すること。
5. 異なるロットの試薬や他製品の試薬を混ぜたりしないこと。

## 7. 取扱上(危険防止)の注意

1. 使用期限の過ぎた試薬は使用しないこと。
2. 本製品に関する安全情報は安全データシートを参照すること。
3. 本品を吸い込んだり、眼、口、皮膚、衣類などへの接触を避けること。
4. 本製品の廃棄の際には、各施設や地域および国のルールに従い、適切に廃棄すること。
5. 本品は、動物由来成分を含むので、取扱に注意が必要である。
6. アジ化ナトリウムは有毒化学薬品である。本製品の含有量は危険なものとして分類されないが、蓄積されたアジ化ナトリウムは爆発性の金属アジ化物として形成され、水道管に含まれる銅、鉛と反応する可能性がある。そのようなリスクを避けるために大量の水とともに洗い流すこと。
7. ヒト由来の検体は、取扱者に感染をひき起こす危険性がある。従って、適切な取扱および廃棄法を用いるとともに、この免疫組織(細胞)化学染色法を施行するに際し、関連技術および操作法に充分習熟しておかなければならない。

## 8. 参考文献

- (1) Furumoto, Path. Res. Pract. 173:12-21. 1981
- (2) D. Herms, et al. Virchows Arch 409:233-239. 1986
- (3) Gloria A. Niehans, et al. CANCER September 15:1113-1123.1988
- (4) N. L. Lazarevich, BIOCHEMISTRY (Moscow) 65:117-133. 2000
- (5) Sean K. Lau, et al. Human Pathol. 33(12):1175-1181. 2002
- (6) Luigi M. Terracciano, et al. Am J Surg Pathol. 27(10):1302-1312. 2003
- (7) Yasmin Anum Mohd Yusof, et al. Anal. quant. cytol. histol. 25(6):332-338. 2003
- (8) Jiann-Sheng Su, et al. World J. 21:19(3): 321-327. 2013
- (9) Casandra A. Liggins, et al. Gynecologic Oncology Reports 15: 16-19. 2016

### ■ 研究用としてのみ使用すること。

### ■ 切片の準備

1. 50℃で十分に湯伸ばしした切片(3-4μm厚)をシランなどのコーティングスライド上に貼り付け、37℃の恒温器内で16時間以上乾燥させる。
2. 脱パラフィン → 親水化 → PBS
3. 前処理(抗原賦活化): オートクレーブ処理
  - ① 緩衝液(下記記載)を耐熱性バットに入れ、切片を浸す。
  - ② バットに蓋をする。蓋が取れないように輪ゴムでとめる。
  - ③ 120℃、20分間オートクレーブ処理する。
  - ④ 圧力が十分下がった後、バットごと切片を取り出す。
  - ⑤ バットの蓋をはずし、バットごと切片を常温に20分間以上放置し、ゆっくり熱を冷ます。※オートクレーブ処理後は、バットおよび緩衝液等が高温になっている。これらを取り扱う際は、手袋等を使用し火傷に注意する。
- ⑥ スライドを緩衝液から取り出し、PBSまたはバッファーでよくすすぐ(3分間ずつ容器を2度かえるか、または洗浄ピンを使用する)。

### ・ 抗原賦活化液pH9の作り方

- |   |
|---|
| <ul style="list-style-type: none"><li>• Code : 415201 抗原賦活化液pH9 (調製済)は、そのまま用いる。</li><li>• Code : 415211 抗原賦活化液pH9 (10倍濃縮)は、精製水で10倍希釈する。</li></ul> |
|---|

### ■ 参考: ヒストファイブ 抗原賦活化液pH9 (Code:415201またはCode:415211)を用いた温浴処理を用いる場合(おもて面の■参考参照)

#### 前処理(抗原賦活化): 温浴処理

- ① 温浴槽をあらかじめ95-99℃に温めておく。以下の操作を行うにあたり、軍手等を用いて高温に気をつける。
  - ② 緩衝液(上記記載)を調製し、耐熱性染色バットに入れて蓋をする。これを温浴槽に入れ、95-99℃に温める。(バットは温浴終了まで、水分蒸発を防ぐため、蓋をしておく。)
  - ③ ②の緩衝液が95-99℃に達したら、スライドを緩衝液に浸漬させ、ゆるくふたをする。
  - ④ 緩衝液の温度が再び95-99℃まで上昇したことを温度計で確認してから、40分間、95-99℃でインキュベートする。
  - ⑤ 染色バットを温浴槽から取り出し、蓋をはずす。スライドを浸したまま常温(15-25℃)で20分間放置しゆっくり熱を冷ます。
- ※温浴処理後は、バットおよび緩衝液等が高温になっている。これらを取り扱う際は、手袋等を使用し火傷に注意する。
- 
- ⑥ スライドを緩衝液から取り出し、PBSでよくすすぐ(3分間ずつ容器を2度かえるか、または洗浄ピンを使用する)。